

久敬社塾の曳山たち

OB Y・Y

1. はじめに

私が昭和五十八年に久敬社に入塾した時、玄関でちよつと小さめの赤獅子が出迎えてくれました。思えばカシラだけの曳山なので相当に不気味なはずですが、ちよつと左右非対称なその姿は精悍より愛嬌が勝っていたのかもしれない。やがて秋が来て、千代ヶ丘祭や東京唐津くんち（同郷人懇親会）に向けての赤獅子修理に駆り出されました。当時の赤獅子はまだ表面がペコペコで、新聞紙を何重にも張り重ねて補修と補強を行いました。そんな夜は先輩に食事に連れってもらい、「久敬社では4年に一度、ヤマを作り直しているんだ」「昔は百合ヶ丘駅まで曳きまわしていたんだ」等の話を聞かされました。

今般、都塵が百号を迎えるにあたり、あの先輩たちの

話はどこまで本当なのかを確かめたく、多くの方にご協力を頂き、久敬社塾の曳山の歴史を発掘してみました。それは私が想像した以上に、古く深いものでした。調べが不十分なところもあるでしょうが、しばらくお付き合い合ってください。

2. 伝通院時代

明治十一年に在京同郷人の懇親を目的に創設された久敬社でしたが、明治十九年に唐津からの上京学生のための寄宿舎「久敬社塾」が小笠原邸の一角に開設、増え続ける入塾希望に因應するため、明治二十一年に伝通院に隣接した小石川表町に新たな塾舎を得て、久敬社塾伝通院時代が始まりました。

伝通院時代の様子はわずかに残された文書に頼るしかないのですが、明治三十二年の出来事として「唐津神祭の日である十一月二日に、望郷の念に堪えず、塾生たちが赤飯を炊き、近隣の寺から太鼓を借りて山囃子を奏す」との記載がありました。博多まで鉄道が開通したの

は明治二十四年、唐津開通は大正十五年まで待たねばならなかったこの時代、唐津は本当に遠く、一生帰ることはないと思っていた人も多かったのでしょうか。今も続く「同郷人懇親会（東京唐津くんち）」のルーツです。ただ、この時にはまだ曳山は登場しません。



時代はやや下った昭和五年、十月二十九日との日付のある写真が久敬社塾誌に載っています。そこには、「久敬社塾神祭記念…この日、塾舎の内外は隈なく装飾され、二階に見える鐘太鼓の山囃子は、終日、小石川の天地に響き渡る。家族同伴唐津人集合して山囃子の音を聞きつつ、甘酒と赤飯を食するとき、誰も東京に在る事を忘れる」との添え書きがあります。写真を良く見ると、大八車に載せられた鯛山を見つけることができます。これが今回確認できた最古の久敬社塾の曳山です。鐘や太鼓が塾舎の二階にあるので、鯛山は曳きまわされることは無かったです。大八車の上下動と鯛山の動きを重ねて、塾生がこの日のために一生懸命に作ったものだったのでしよう。

3. 西大久保時代

伝通院の久敬社塾は道路拡幅のため、昭和十年に一旦閉鎖されますが、関係者の熱意により、昭和十六年に新宿西大久保にて再開されます。昭和四十年まで続く西大

久保時代です。

西大久保時代も同郷人懇親会は毎年十一月三日に開かれ、太鼓を近所の神社から借りて、年によっては塾生が作った曳山をリヤカーに載せて山囃子とともに町内を練り歩いていたようです。残念ながらこの時の写真は残っておらず、何ヤマだったかも確認することができませんでした。同郷人懇親会はその後にも継続して開催されていましたが、昭和三十年代は曳山は作られていなかったようです。太鼓ですら毎年神社から借りることが難しくなってしまう、窮状を見かねた唐津のOBから昭和三十年に久敬社塾に太鼓が寄贈されました。今も現役で活躍する太鼓はこの時にいただいたものです。

4. 千代ヶ丘時代

ふたたび都市計画により移転を余儀なくされた久敬社塾は、昭和四十一年に現在の地、川崎市麻生区千代ヶ丘に塾舎を建て、千代ヶ丘時代が始まります。

【酒呑童子と源頼光の兜】

移転の翌年である昭和四十二年に、唐津くんちに帰省できなかつた数人の塾生が曳山づくりを思い立ちました。同郷人懇親会も終わった十月も半ば過ぎの事だったようです。裏山から竹を切り出し針金と組み合わせて骨組みを作り、新聞紙を貼り付けて形を整え、一番外側は白い和紙、ペンキで色を付け、兜の眉や髪の毛は、墨汁で染めたモップだったようです。裏の農家から借りたりヤカーにヤマや太鼓、鐘を乗せ、当時まだあった久敬社塾のグラウンドで塾にいた十人あまりで曳いてまわったそうです。そのうちにお酒も入り、誰ともなしに「百合ヶ丘駅前に行こう」となったとのこと。リヤカーをパンクさせながらも何とか駅前に到着し「えんやゝえんやゝ」騒いでいると、当然のようにお巡りさんがやってきた、とその時、幸運にも百合ヶ丘商店街の副会長さんが現れて、「唐津くんちの山笠は、テレビで見えています」「是非、十一月三日の百合ヶ丘祭にこの山車を出してください」との助け舟を出してくれたそうです。百合ヶ丘祭では五十メートルほどの綱引き用の太い綱が用意され、びっ

しりの子供たちと曳山を曳くことができました。もしこの時、副会長さんが現れなければ、お巡りさんにこっぴどく叱られ、今の千代ヶ丘祭もなかったかもしれない。この酒吞童子のヤマは、その年の塾祭で焼却したそうです。



【赤獅子（初代）】

翌四十三年も曳山が作られました。この年は刀町の赤獅子です。この年からは多くの塾生も製作に参加し、ヤマはより立派なものに。もちろん百合ヶ丘祭にも参加。そしてこのヤマもその年の塾祭で燃やされました。



【鯨】

昭和四十四年は鯨が作られました。この年、久敬社の賄いの方に四つ車のリヤカーを買っていただき、鯨山は上下に動くように作られました。さらにヤマの上に塾生がまたがることができ、見事な出来栄でした。これもまた百合ヶ丘祭に参加、塾祭のキャンプファイヤーにて焼却しお別れしました。



【青獅子（初代）】

昭和四十五年は青獅子です。次の写真は百合ヶ丘祭の様子です。獅子の両側のロープにびっしり子供たちが連なり、たくさん見物人のなかで笛を吹く塾生も誇らしげですね。この青獅子は、当時の島田塾監の強い指示もあって、塾祭でも燃やされず、数年は塾生と百合ヶ丘の人たちを楽しませたようです。



【飛龍】

次に登場する曳山は昭和五十一年の飛龍です。台車はリヤカーから軽自動車のシャシーに進化したようです。二年後に「赤獅子（二代目）」が製作されたことから、飛龍の活躍を伝える写真を発見することができず、次の写真は昭和五十五年に久敬社のグラウンド閉鎖（テニスコートとして貸し出すため）の際に“お別れ”した際のもので、四年で作り替える伝説の起源はどうやらこの飛龍のようです。



【赤獅子（二代目）】

飛龍製作からわずか二年後の昭和五十三年に、塾生大会で新しい曳山製作が決定されます。二代目赤獅子です。何が塾生を駆り立てたのか、今となっては想像することしかできませんが、塾生総がかりだった製作は相当に大変だったと、この五年後に入塾した私もよく聞かされました。曰く、誰々君はこれで単位を落とした、いや留年した云々。よほど衝撃的だったのか（いや、赤獅子の出来があまりに良すぎたためです）、その後、曳山を作り直そうという声を一度も聞かなくなりました。二代目赤獅子では、着任早々で若さあふれる中山前塾監も大乗り気で、解体業者からトラックのシャシーを譲り受けて塾生と一緒に台車を自作、ブレーキとハンドルが付いた史上初（私調べ）の曳山となりました。唐津の方々もからもたくさんの厚意を頂いております。法被や刀町の幕は唐津OBや唐津神社から寄贈。鯛山の白い法被も、そのころ銀座で鯛山を曳くイベントがあり、これを手伝った塾生にお礼として残してくれたものです。

昭和五十二年に「有楽こども曳山祭（千代ヶ丘祭）」

が始まっています。祭の主催者である有楽自治会も、千代ヶ丘移転当時の島田元塾監の声掛けで結成されたもので、有楽自治会館ができるまでは久敬社の会議室で自治会会議が行われていました。昭和四十年代も当時の曳山が町内を巡行する際に各家庭にお札を配ったりしていたようですが、千代ヶ丘の子供たちと一緒に曳くようになったのは、昭和五十二年からです。このお祭りは三十五年以上を経た現在も続いており、毎年三百人を超える子供たちが参加してくれます。なかには子供のころにヤマを曳いたことがあると、遠方に嫁いだ女性が子供を連れて参加してくれたりもします。また、予行演習と称して、夜、塾生だけで町内を曳きまわる「宵山」は、私が入塾する直前の昭和五十七年頃から始まったようです。



【青獅子（二代目）】

平成二十二年。この年に病気で亡くなった現役学生を偲び、赤獅子を彼の出身である中町の青獅子に改造して、有楽こども曳山祭に参加しました。色だけでなく、耳や角も青獅子風に作り変えました。



5. むすびにかえて

二代目赤獅子は毎年塾生の補修を受け、今も大切に使われています。特に平成六年にはヤマの内側から頭に昇れるような大改造を施し（案の定、ヤマから塾生が落ちたそうです）、より安全・安心なヤマとなり、私のころは角張って踏み抜きそうなくらい薄かった表面も、厚く丸くなり貫禄すら出てきています。

私にとっての久敬社のヤマはこの赤獅子ですが、今回、曳山の歴史を調べさせていただき、ヤマや道具達、そして同郷人懇親会や千代ヶ丘祭という行事のなかに引き継がれている久敬社塾関係者の想いを感じることができました。調べ事にご協力いただいた多くの先輩方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。また、新しい資料や写真、記事の訂正等がありましたら、久敬社塾までご一報ください。毎年十月には千代ヶ丘祭、東京唐津くんちが開催されます。お近くの方は、是非、久敬社塾の曳山に会いに来てください。

（昭和六十二年卒）